山根　幸子
元職員

ＨＡＮＤＳ世田谷がオープンしたばかりの頃、まだパソコンさえなかったような頃、介助コーディネーターとして仕事をさせていただきました。もう 20周年と聞いて驚きました。長きに渡って御無沙汰ばかりの私を忘れずにいて下さったことにも驚いています。あの頃お世話になった皆様、本当にありがとうございました。

大切な方々が去られていく中で、たくましく変貌を遂げながら発展していくＨＡＮＤＳ世田谷は本当に素晴らしいと思います。

私事で恐縮ですが、私は 10年ぐらい前に夫が難病になり小さな小料理の店を始めました。当時出会った方々の話を店ですることもあります。山口さんや二日市さんには個人的にも随分お世話になりました。最近になって改めて、私の心の深いところで皆様が支えになっているなと感じることも多々あります。

これからもＨＡＮＤＳが世田谷にとっての希望の星であり続けることをお祈りします。皆様お元気でね。

小佐野　彰
旧利用会員
NPO法人　自立の家　代表

「HANDS世田谷20周年・ケアズ世田谷10周年に寄せて」

HANDS世田谷20周年・ケアズ世田谷10周年にあたり、心より敬意を表します。

HANDS世田谷が設立された1990年といえば、障害のある人の地域生活を支える介助制度は国による「措置制度」として実施されていました。つまり「措置制度」は、まがりなりにも理念的には日本国憲法第25条に基づく国民の生存権保障として障害のある人の「介助を受ける権利」を認めていたのです。しかし、その一方で実際の介助制度は未整備のままでした。

私がHANDS世田谷の介助派遣事業を利用させていただいたのは 1993年から 1996年までででしたが、その頃は上述した背景の下で特に昼間の介助者の確保が難しく、本当に厳しい時代を支えていただきました。様々な介助者の方との出会いは、今でも私の心の中に大切な思い出として残っています。

それから時は移り、2000年には高齢者を対象に介護保険制度がスタートし、2003年には「措置から契約へ」ということで障害のある人の分野でも「支援費制度」が実施されました。

そして2006年の秋から「障害者自立支援法」に移行しましたが、その結果、利用者の障害種別の拡大と一定の制度水準が確保されたものの、それら一連の国の制度変更の動きの中で「契約制度」の名の下に、基本的な生存権が「自己責任に基づくサービス購買力を前提としたもの」へと変質させられてしまいました。しかも「障害者自立支援法」実施時における国の居宅介護事業基準単価の大幅な引き下げも相まって、地域に居宅介護事業を利用する権利を有しながら居宅介護事業所から契約してもらえない重い障害のある人がたくさん存在しています。

ところで、最近私は「障害当事者とは誰のことなのか？」とよく考えるようになりました。日常的に身体に重い障害のある人や知的に重い障害のある人と出会うにつれ、本人の「自己選択と自己決定」のみでは済まされない数多くの現実と向き合ってきました。また、私自身も年齢を重ねるごとに日常生活の自己管理が難しくなり、介助者の支援の重要さが増してきています。このような自らが抱える現実を踏まえ、今後とも微力ながら「障害当事者」を支える活動を継続できるように頑張りたいと思いますので、HANDS世田谷・ケアズ世田谷の皆様の変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。

最後に、重ねてHANDS世田谷20周年・ケアズ世田谷10周年本当におめでとうございます。

川西　浩之
現利用会員
「ＨＡＮＤＳ世田谷で学んだこと」

私が、ＨＡＮＤＳ世田谷と関わったのは23歳ぐらいだったと思います。
当時、上田要さんとともにバスから地域交通を考える会という、バスを通じて、誰もが利用しやすい、車両の導入や、システムの研究、世田谷区の街づくりネットワークショップの方々とバス停の整備のやり方を夜遅くまで話し合っていました。また昼間は、授産施設に送迎バスで通う生活をしていました。そんな中で、ＨＡＮＤＳを知り、関わり始めました。
歩行補助杖を突いて歩いて世田谷代田の旧事務所まで通いました。横山理事長に着いて厚生労働省で開かれた要求者組合の介助料の交渉に頻繁に通ったことを覚えています。

そこで見たものは、のらりくらりと障害当事者の要求と質問に答える官僚の姿と、必死で私達の実情を訴える姿でした。係長らの答えに満足せず、大臣官房まで行き、「大臣に合わせろー」とドアを電動車椅子でぶつかっていた姿でした。

ここまでやらないと、健常者には伝わらないのかと思いました。
当事者の生活がよくなるために、会議もよく開かれました。時には、夜8時ぐらいまで話し合われることもあり、当時は両親に生活の世話をしてもらってたので、遅く家に帰ると家族が寝不足になり困ると、いわれた事等がきっかけとなり、自立生活に結びついていきました。ＨＡＮＤＳの方々は、介助者の募集の仕方とか、住宅の探し方等、様様なことをを教えて下さったのですが、施設育ちの私は、最初に手伝ってくれた.介助者の言われた通りに過ごしていたように思います。それが、私は9年続きました。その介助者は、私の性格がわかるととても威張っていた介助者でした。それを取り締まって下さったのもＨＡＮＤＳ 世田谷でした。これからも、介助者の味方、障害当事者の味方でいて下さい。

金重　泰行
元職員
株式会社ケアカンパニー　代表

「ＨＡＮＤＳ世田谷20周年・ケアズ世田谷10周年に寄せて」

この度は自立生活センターＨＡＮＤＳ世田谷20周年・ケアズ世田谷10周年、誠におめでとうございます。思い返せば私がＨＡＮＤＳと最初に関わるきっかけになったのは、私が中学校一年生の時に現理事長の横山さんがＰＴＡの集まりに光明に来て頂いた時に私の母親が影響を受けてからでした。そしてある日「今日から定期的にヘルパーさんに来てもらうから」と母に言われ、「よく分からないけど別に良いよ」となんとなく答えました。その時は今ほどにヘルパーさんの重要性を理解出来ていなかったのです。その後、私は高校二年生の時に「あと 1年ちょっとで学校を卒業して社会に出るけど、私に何が出来るのだろう？障害者である自分が何か世の中に対して出来る事があるのだろうか・・・」と悩んでいました。そんな時に“卒業生を囲む会”というかたちで横山さんの話を自分から聞く機会を頂き、話を聞いた時に「なんてこの人はすごいんだろう！自分でやりたいことを見つけて頑張っていて、すごくキラキラしているなぁ」と感じました。この人の側でもっと色んな話を聞き、一緒に働いてみたいと強く思い「卒業後は絶対ＨＡＮＤＳに入ろう！」と決めました。そしてＨＡＮＤＳに入れば何か自分も変われると思い期待していました。しかし、その後の私は良い意味で期待を裏切られることになったのです。ＨＡＮＤＳ世田谷に入れば自分のやるべきことがすぐに見つかり、自分の果たすべき役割が出来て自分も大きく成長出来ると思っていました。ですが自分から周りに溶け込んでいかないといけないし、溶け込んでいく手段も自分で見つけていかなければなりませんでした。それはとても苦労する経験だったので、自分を成長させる事が出来ました。また、それと同時にＨＡＮＤＳ世田谷の他のスタッフの方や横山さんと話していくうちに自分も一人暮らしをしたいと強く思うようになりました。この時点からヘルパーさんに対する想いが変わり、自分自身にとってかけがえなく自己実現するには欠かせない存在であることが分かりました。

近年の日本では福祉に関心が高まっていますが、障害者・高齢者などの当事者やその家族からしてみれば、受身なかたちでもなんとか過ごせていける世の中になろうとしているように感じます。そんななかで、ＨＡＮＤＳ世田谷・ケアズ世田谷の“当事者が主体となって個々人の自己実現をサポートする”という団体の在り方はこれから先も無くてはならないものだと思います。私自身は団体から離れてしまいましたが、これからもＨＡＮＤＳ世田谷・ケアズ世田谷の発展と継続を期待しています。私のように良い方向に変わっていける人が今後も増え続けるかもしれないのですから！

望月　芳子
元職員

「ＨＡＮＤＳ世田谷20周年・ケアズ世田谷10周年に寄せて」

ＨＡＮＤＳ世田谷20周年、ケアズ世田谷10周年おめでとうございます。光陰矢の如し、月日の過ぎ行く早さを思います。ＨＡＮＤＳ世田谷が、中町で産声をあげ人間でいえば成人式をむかえました。よくぞここまで、育ったねと、天上から微笑んでいる成子さん、これからはここが正念場というときには、多いに頑張れと叱咤激励してくれる二日市さん、地域で自立生活をし、私たちに地域で暮らす様を、身をもって示してくれながら、先に逝かれた会員さんもきっと見守ってくれていると思います。ＨＡＮＤＳ世田谷、ケアズ世田谷の介助会員の人達にも沢山出会いました。私は、ＨＡＮＤＳに出会うまでは、介助者と地域で暮らすことは、家族がいてあたりまえという姿を介助の人をとおして、見せられた光景にはカルチャーショックをうけたものです。

1991年11月にＪＩＬ（全国自立生活センター協議会）に加盟。1990年2月スタート。地域で自立生活の先輩3名介助者2名が「介助者派遣システム構想」を立てたことを私が知ったのはしばらく経った頃と記憶しています。その熱き思いに呼応し集まったなかに私がいたといえばかっこいいのですが、井のなかの蛙よろしく、地域で暮らしていただけの自立ってなに？の、もろ中年おばさんがいきなり仲間入り、きっと皆の足を引っ張っていたことでしょう。

特定非営利活動法人（ＮＰＯ）を取得するための勉強会、ホームヘルパー研修講座ＪＩＬの自立生活プログラム、ピアカウンセリング等、いろいろな所に行き、ある時は意気投合し明日朝の講座があるのに真夜中までお喋りしたことも。なかでも印象深いのは、ＪＩＬに加盟する自立生活センター代表何人かが「都」、また「厚生労働省」の担当者と話し合い、あるいは具体的な交渉もあり、その席にＨＡＮＤＳ、ケアズ理事長横山さんが最前列にいました。そのときはＪＩＬの仲間達が、全国から集合し、デモンストレーション、雪がちらついた日、ぎらぎらした太陽の下など私も新宿公園、霞ヶ関の厚生労働省前などを何回か、当事者として、支援者と共にシュプレヒコールの渦の中にいました。今も当事者としての思いを強く持っています。

桜井　征夫
元世田谷区議会委員

「ＨＡＮＤＳ世田谷」結成20周年にあたり、心からお祝いを申し上げます。
自立と社会参加と平等の実現に向けた長く辛い闘いの中から、誕生した「ＨＡＮＤＳ世田谷」は、多くの皆様の理解と協力によってスタートしましたが、何よりも当事者である皆様方お一人お一人の献身的な努力と闘いによって今日を迎えることが出来たのだと思います。

これまでの皆様方のご労苦を想い、只々頭の下がる思いです。長年のご努力に心から敬意を表するばかりです。

この記念すべきときに、障害者運動の先頭に立ってこられた山口成子さんがおられないことは残念でなりません。

毎日毎日夜遅くまで仕事に打ち込み、壁にぶつかるたびにお電話を頂いた思い出は忘れられません。共に歩んで来れたことを誇りに思います。

「社会福祉の基礎構造改革」から「支援費支給制度」へ、そして「自立支援法」へと制度の一方的な変更が行われ、当事者は振り回され続けて来ました。今また新たな制度確立に向けて取り組みがスタートしていますが、今度こそ真に自立を保障した制度が確立できるよう、長年にわたる皆様方の闘いの中から蓄積した実践経験が生かされ、反映されるよう、積極的に発言・行動して、より良い制度とするよう一層のご尽力とご活躍を期待しています。

「ＨＡＮＤＳ世田谷」の益々のご発展と皆様のご健勝をお祈り致します。

中西　正司
全国自立生活センター協議会常任委員
「運動体としてのＨＡＮＤＳ世田谷」

20周年おめでとうございます。

ＨＡＮＤＳは常に脳性麻痺者の自立生活センターでした。初代の代表は山口さんでした。彼女は常に当事者主体の運営を心掛けていました。自立生活センターの中でも唯一だと思える当事者のコーディネーターを持つ理想的なセンターとして、まばゆい存在でした。

望月さんは心優しいコーディネーターで常に山口さんの支え手となっていました。

横山さんが所長になってからは、自立支援法下での削減の嵐の中に突入することになります。区との度重なる交渉の中で、ＨＡＮＤＳの運営も大変な状況になり、自立生活センターの会議にも横山さんが出られなかったり、遅れて来たり、早退したりという事態が続きました。

それでも横山さんは常に運動の先頭に立つ先鋭な激しいリーダーでした。「介助サービスよりも運動を」という横山さんの呼びかけのもと、常に素晴らしいスタッフが揃い、今も当事者主体の運営を続けています。今後も自立生活運動のよきリーダーとして運営を続けていってください。

赤平　守

ケアズ世田谷　理事

日本障害者協議会　理事　企画委員

「“横山晃久伝”云々」

ＨＡＮＤＳ世田谷20周年、おめでとうございます。この20年の間に障害者施策にも何度か転換期がありましたが、極めつけは昨年の政権交代ではなかったかと思います。あの、政権交代は本当の変革を成し遂げられるのか？

さて、今年2010年はＮＨＫ大河ドラマ「龍馬伝」により、坂本龍馬を筆頭に幕末の偉人達が注目を集めています。ＨＡＮＤＳ世田谷代表の横山晃久氏は幕末の偉人に当てはめると一体誰になるでしょうか？スキンヘッドの坂本龍馬は全くイメージできませんので、これはないとして・・・。決して、金持ちではないので、今年のもう一人の注目の主、三菱財閥の創始者、岩崎弥太郎でもなさそうです。とすると、その破天荒な行動力とキップの良さからすると、龍馬の師匠的な存在、勝海舟（ただし海舟の“海”は“怪”かもしれませんが）とか、その恰幅の良さからして西郷隆盛なんかも想像されます（持ちあげすぎ？）。いずれにしても、横山氏が平成維新のため、障害があろうが無かろうが、理屈抜きに、人が人らしく地域で暮らしていけることを訴え続けたことは事実ですし、まさに継続は力哉ということでしょうか。とにかく私はこの人が好きですね。

一口に20年といっても、一人の人間が成人するまでの年月の積み重ねです。例えば、スポーツ選手が現役としてその力を20年持続させることは並大抵の努力ではありえません。今ある、現実。そこにはいつも問題点があるように思われがちです。しかし、そこに至るには、その要因となる事柄と時間の流れ、そして、人それぞれの歴史、さらに社会の動向がある事を忘れてしまっては問題解決の道は見えてきません。

これからもＨＡＮＤＳ世田谷に集う人たちが、それぞれの「存在感」を意識して、「一体感」を持って、「達成感」を感じられる活動が今後とも大きく展開していかれることを心より祈っています。

荻野　陽一

元役員

現「ユニバーサルデザイン推進条例」に基づく審議会副会長

私と「ＨＡＮＤＳ世田谷」との本格的な出会いは、1995年だと思います。それ以前も名前は知っておりましたし、スタッフのみなさんとの個人的なつながりはありましたが、活動を共にした経験はありませんでした。

この年、世田谷区では「福祉のいえ・まち推進条例」が制定される動きがありました。これに「ＨＡＮＤＳ世田谷」が敏感に反応し、条例に障害者、高齢者などの生活者の声を反映しようと区内のまちづくり系団体に呼びかけ、「世田谷福祉のまちづくりネットワーク」を組織し当事者参画の条例提案活動をリードしていってくれました。この会の代表には、当時、ＨＡＮＤＳ世田谷の理事長であった故山口成子氏が就任し、私が事務局長を仰せつかりました。私は、自立生活運動ではないまちづくり活動を通してＨＡＮＤＳ世田谷との関わりを深めていったのです。

この条例を広く知らしめる目的で行なった「まちづくりプレゼンツ96」の企画運営や条例案の対案書作りは、右も左も分からないまちづくりビギナーの私にとっては、貴重な経験になりました。これがきっかけになって、私はまちづくりに本格的に関わるようになっていきました。そして、2010年現在、先述した「福祉のいえ・まち推進条例」の進化形とも言うべき「ユニバーサルデザイン推進条例」に基づく審議会の副会長に就任しています。条例制定当時の思いを胸に、世田谷のまちをよりよくするため、自分なりに活動していきたいと、昔を振り返り改めて思います。「ＨＡＮＤＳ世田谷」がリードした 90年代後半のまちづくり活動は、私という一人の人間の成長過程に大きく寄与してくれたということを、感謝の意を込め記しておきます。

もう一つ、「ＨＡＮＤＳ世田谷」との関わりで忘れられないものがあります。1997年の「バリアフリーコンサート」、そして翌年の「バリアフリーステージ」の企画に関わらせてもらったことです。障害当事者による音楽、ダンス、芝居など思い思いのパフォーマンスが集結し、素晴らしい瞬間が創造できた伝説のイベントと言って良いと思います。20周年を機に再演したいような気分です。

こうした活動を経て、私は「ＨＡＮＤＳ世田谷」の監事をやらせていただきました。内実を知れば知るほど苦労が多いことが分かってきました。未だ障害者をめぐる情勢は、楽観視できないものですが、20年の実績は伊達じゃない！30周年に向けた力強い歩みを今から踏み出せると思います。新たな一歩に期待します。

齋藤　明子
HANDS世田谷　理事
コミュニティサポート研究所　事務局長

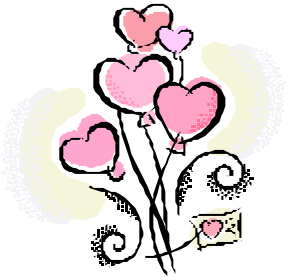
「これまでの10年、そして…」

HANDS世田谷20周年、ケアズ世田谷10周年おめでとうございます。

HANDS世田谷の10周年記念誌『新しい風にふかれて』を見て、この頃は皆さんも私も真面目だったなぁ、と思いました。今は不真面目だということではなく、目の前のことに必死で余裕が無かった、という意味です。この10年間には色々なことがありました。悲しい出来事は山口成子さんと二日市安さんが別の世界に逝かれたことです。介助制度については支援費制度ができて自立生活センターが財政的に一息ついたと思ったら、あっと言う間に「自立支援法」に移行して、“できたかな”と思った基盤をグズグズにされてしまいました。現在は政権交代により良くなりそうな「予感」はありますが、確かなものは何も手にしていません。

この10年私自身は自立生活センターから、やや距離を置いてきました。HANDS世田谷とのお付き合いも理事会に出席するだけでしたが、それは何もする必要が無いほどHANDSがしっかりしていたからです。仕事や活動に直接貢献しなくなっても、理事にしてくださり、昔のつながりを切らないところが他のセンターにないHANDSの持ち味であり人間味でしょう。

この先の10年はどうなるか？たぶん障害者が良い意味でも厳しい意味でも特別扱いされなくなり、真の実力が試されるようになると思います。自立生活センターに限らずビジネスの世界でも、『良い組織』は人間の権利を尊重すると同時に、そこで働く人々が能力を活かして自由に活躍できるようにしています。さらに事業を通じて社会に貢献しつつ、ずっと存続し続けられる安定した運営をしています。
HANDS、ケアズもそんな組織になってほしいと思います。



樋口　恵子
元理事
「ＨＡＮＤＳ世田谷20年」

ヒューマンケア協会が、自立生活センターとしてスタートしてまもなくからスタートさせたＨＡＮＤＳ世田谷、もう 20年になったのですね。おめでとうございます。

最初から重度の障害者たちが地域で生きられるための活動に徹して来たＨＡＮＤＳでしたね。

介助料の公的保障が少ない中からのスタートで、重度の障害当事者でありながら、組織を引っ張っていくことの大変さをもちつつ、仲間支援に徹していた、今は亡き山口茂子さん、そして、横山さんと障害者スタッフ、それをバックアップしてくれていた二日市さん、三本木さん、自立生活センターの海外の情報を常に伝え続けてくれた斉藤さん、みんなのエネルギーがひとつになって、困難に立ち向かったという思いがありますね。

高齢社会の到来と共に、めまぐるしく福祉制度は変わり、翻弄されまいと抗いながら、社会に発信し続けられ、闘い続けてきて今があります。

この団体を 20年にわたって支えてこられたご苦労は大変なものだと思います。

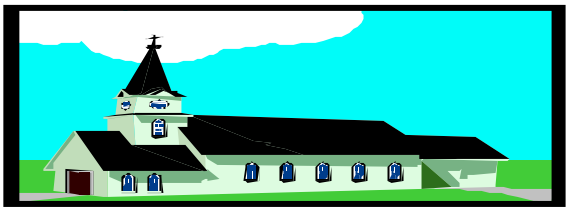
長い閉塞感から、国連障害者の権利条約発効、新政権の樹立による福祉制度の広範な見直し、しかも、障害当事者の手により、進められていることに感慨を覚えます。

よくやってきたよね、みんな！！って感じです。

山口さんが亡くなり、二日市さんが亡くなり、スタッフの入れ替わりなど、20年の間には大変なことがたくさんあったことと思います。これからは世代交代という課題が控えています。

私は、東京を去りふるさとの高知に戻って 3年目を過ごしています。この地域では障害者の姿が無く、どこにいるのだろうという感じで、福祉施策も地域格差の大きさを感じます。いろんなところで何もないねと言ってきましたが、そのままにできない気がしてきて、この地域にあう自立生活センターを作ろうと動き出しました。『土佐の太平洋高気圧』という名称で、自主福祉講座を開催したり、バリアチェックをしたり、そんな日々のことを新聞に投稿したりしています。人を育てながら、じっくり自分の甥とも向き合いながらやれることをやっていこうと思っています。

大先輩諸氏よろしくご指導のほどを。



堀内　万起子
ケアズ世田谷　理事

「ＨＡＮＤＳ世田谷20周年に寄せて」

ＨＡＮＤＳ世田谷もとうとう 20周年を迎えたとのこと、本当におめでとうございます。この長い時間、1つの思いを胸に活動を続けてきたということはかけがえのない財産だと思います。ＨＡＮＤＳ世田谷の歴史をひも解くと、初代理事長の山口さん宅から始まった小さくも逞しい創成期。助成金も取れるようになり、会員や活動も広がった成長期。事業がどんどん大きくなり上り調子にどこまで行くんだ?!というバブル期もあれば、もう解散してしまうか!?という言葉がのどの奥から出そうになった混沌期もあったように思います。振り返ればどれも楽しく、みんなで乗り切ってきたことが誇りです。ＨＡＮＤＳは、そんな中で、悲しい別れや新しい出会いを繰り返しながら、沢山の人と繋がってきました。とても素敵で大切なことです。

私とＨＡＮＤＳ世田谷との出会いは、16年程前でした。交流会の後、そのままの流れで居酒屋にみんなで雪崩れ込んだのを、とても懐かしく思い出します。障害がある者も無い者も学生も年配者も男も女も、とにかくごちゃまぜになって、時間も忘れて、酒を飲みながら話をしました。「障害者にとっての社会の生きづらさはどうして起こるのか。」という話から「ここがおかしい。」「こうなるべきだ。」「私達はどうしていけばいいのか。」と言った議論が熱くかわされました。私はそこで初めて、運動・健常者・介助などの言葉を聞き、様々な問題を知りました。中途で障害者になりこの世界と直接縁がなかった私にとって、そこは、新鮮で、人間として社会で誰もが自分らしく生きていくという正しさを理解した場でした。そしてそこは、とても不思議で、誰もがとても自然に溶け合っている空間でした。

現在、ＨＡＮＤＳも含めＣＩＬは事業化し、スタッフは仕事に追われ、疲れてしまっていて、活動や運動に対する思いはあるものの、思いを語り合う時間がとれていない気がします。時には、事務所を飛び出して、時間を忘れて、沢山の胸の内を語り合ってほしいと思っています。こんなにいろんな、背景や状況、年齢や性別、活動や人生を持った人がフラットに集まる世界はないよ！どうか誰もが自然に溶け合って繋がっていくあの空間を作って下さい。それは、きっと段々と広がり、社会をも溶け込ませる力になっていきます。そして、きっと何でも乗り切れるような力の源になると思います。

これからも末長くみんなのＨＡＮＤＳ世田谷でありますように、心から応援しています。

熊本　哲之
世田谷区　区長
「祝辞」

特定非営利活動法人　自立生活センターＨＡＮＤＳ世田谷が、創立20周年を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。

平成2年に設立されて以来、さまざまなご苦労を乗り越え、今日を迎えられましたのも、横山理事長をはじめ歴代の役員、会員の皆さんのご尽力の賜物と、心から敬意を表します。

自立生活センターＨＡＮＤＳ世田谷では、障害者の皆さんが地域で安心して生活していくためのホームヘルプ事業やその人材育成のための重度訪問介護従事者養成研修を実施されるなど、障害者を地域で支えるさまざまな事業に積極的に取り組まれています。また、区からは相談支援事業を委託させていただいていているところです。これまでも地域福祉の向上に、お力添えいただいておりますことに深く感謝申し上げます。

区では、「世田谷区第2期障害福祉計画」のもと、障害者の皆さんが安心して地域で自立して生活を継続できる社会を実現するために、今後とも、障害福祉施策の推進に全力で取り組んでまいりますので、引き続き、皆さんのご理解とご協力をお願いいたします。

結びに特定非営利活動法人　自立生活センターＨＡＮＤＳ世田谷のさらなるご発展と横山理事長をはじめ、皆さんの益々のご健勝を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

関係者の皆様、お忙しい中
メッセージを下さり、ありがとうございました。
この場を借りて、心よりお礼申し上げます。